

## 旧呉鎮守府司令長官官舎（入船山記念館）

旧呉鎮守府司令長官官舎は、呉の重要な海軍鎮守府としての歴史と史料を保存するために

1967年に開館した野外博物館「入船山記念館」の一部である。森の中にある複合施設は、敷地内に移築された歴史的建造物のほか、郷土資料館、歴史資料館などで構成されている。

入船山の丘は、元々は呉の守護神を祀る亀山神社（703年創建）があった場所で、総司令官邸があった前は、呉の守護神を祀っていた。亀山神社は、1886年に呉が海軍の要所に指定されて間もなく、現在の場所に約半キロ北東に移された。1890年、帝国海軍はこの丘の上に総司令官邸を建てた。第二次世界大戦末期までの40年間、32人の歴代の司令官に仕えた。また、ワシントン会議全権大使を務め、後に首相となった加藤友三郎（1861-1923）や、首相として連合軍との最後の和平交渉に貢献し、第二次世界大戦の終結に貢献した鈴木貫太郎（1868-1948）などの著名な人物もいる。

戦後、連合軍の占領下であり、呉に本部を置く英連邦進駐軍の司令官が使用していた。この間、内壁を白塗りにしたり、部屋を仕切っていた欄間を撤去して開放的な空間にするなど、西洋風のテイストに合わせて建物全体が次々と改造された。1956年の占領が終わると連合軍から日本政府に返還され、5年間の改修工事を経て1995年によりやく元の姿に復元された。

この建物は、日本の建築家として初めて英国の公的資格を取得した桜井小太郎（1870-1953）に設計された。正面の公共用の洋館と背面の私用の和館から構成されている。このような折衷的なスタイルは、明治時代の特徴であり、官公庁や公共の場では洋装や形式が採用されたが、家庭生活は変わらなかったという。洋館の外観は半木造、屋根は魚鱗文様の石板が敷かれている。内装は、フローリングの床や1990年代初頭の改修時に発見された金唐紙（きんからかみ）の壁紙が特徴的である。一方、和館は、畳の床や外縁に沿った縁側など、伝統的なデザインの要素を取り入れている。小太郎が生み出した厳格な建築的分離は、特に両館をつなぐ扉に顕著に現れている。和館に面した側は、伝統的な襖に似ていますが、反対側から見ると木製の洋風の扉に見える。この住宅は1998年に国の重要文化財に指定された。